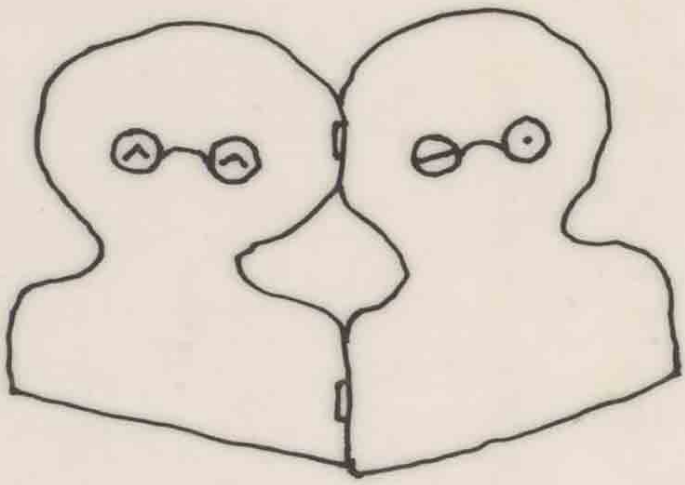
中国ユーモア文学傑作選

笑いの共和国

藤井省三＝編



白水uブックス

白水Uブックス　96

笑いの共和国　中国ユーモア文学傑作選

編者 © 藤井省三（ふじいしょうぞう）

発行者　藤原一晃

発行所　株式会社白水社
東京都千代田区神田小川町 3-24
振替東京 9-33228　〒101
電話(03)3291-7811(営業部)
(03)3291-7821(編集部)

1992年6月5日印刷
1992年6月25日発行
本文印刷　理想社
表紙印刷　集美堂
製　　本　加瀬製本所
Printed in Japan

ISBN 4-560-07096-2

白水uブックス

目次

あひるの喜劇（魯迅）――藤井省三訳　5
宴のあと（凌叔華）――大槻幸代訳　11
結婚騒動（胡適）――清水賢一郎訳　20
若奥さまの家出（張天翼）――鈴木将久訳　39
自殺の話（沈従文）――長堀祐造訳　63
外国人が京劇およびその他を観ると（張愛玲）――藤井省三訳　79
小二黒の結婚（趙樹理）――加藤三由紀訳　93
入　党（耿竜祥）――櫻庭ゆみ子訳　122
将軍、それはなりませぬ（葉文福）――長堀祐造訳　135

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

林ばあさん（楊絳）――櫻庭ゆみ子訳　155
蠅・前歯（莫言）――藤井省三訳　168
秘　密（柏楊）――長堀祐造訳　204
愛　奴（張系国）――垂水千恵訳　231
解　説（藤井省三）――　251

魯迅（ろじん）

あひるの喜劇

ロシアの盲詩人エロシェンコ（一八九〇―一九五二。大正期の日本で音楽家、童話作家として活躍、一九二一年危険思想家として日本を追放されて中国に渡り、北京大学エスペラント語講師を勤めた）さんは、例のギターを提げて北京にやってくるとまもなく、私にこう訴えた。

「寂しい、寂しい、砂漠にいるように寂しい」

これは真実には違いないが、今まで私はそんなふうに思ったことはなかった。長いこと住んでいるので、「芝蘭（しらん）ノ室ニ入リ、久シクシテ其ノ香（こう）ヲ聞カズ」（芝蘭ノ室、香草のある部屋。環境の良いことのたとえ）となり、ひどく騒々しいと思うばかりなのだ。もっとも、私の言う騒々しさこそ、彼の言う寂しさなのかもしれないが。

それでも私は北京には春と秋とがないような気がする。長いこと北京にいる人は、地気が北にずれた、昔はこんなに暖かくはなかった、と言う。ともかくも、私には春と秋とがないように思われる。冬の終わりと夏の始まりとが連続しており、夏が去ると、冬が始まるのだ。

そんな冬と夏との変わり目のある日のこと、しかも夜中に、たまたま暇のできた私は、エロシェンコさんを訪ねることにした。彼はずっと仲密（チョンミー）（魯迅の弟周作人のペンネーム）さんの家に住んでいる。このとき、家中寝

静まり、天下は至極平安であった。彼は一人自分のベッドにもたれていたが、高い額には金髪の長い髪がかかり、眉間にはかすかに皺がよっている。曾遊の地ビルマ、ビルマの夜を思い出しているのだろう。

「こんな夜には」と彼は言う。「ビルマではどこもかしこも音楽。家の中でも、草むらでも、木の上でも、どこでも虫が鳴いて、いろいろな鳴き声の合奏となって、とても不思議なものです。そこにしょっちゅう『シュッ、シュッ』という蛇の声が入るんですよ。それがまた虫の声によく合ってね……」彼は物思いに耽った。その時の光景を思い出そうとするかのように。

私は何も言えなかった。こんな不思議な音楽は、たしかに北京では聞いたこともなかったので、いかに愛国的であろうとも、弁護のしようもない。彼は眼こそ見えないものの、耳は聞こえるのだから。

「北京ではカエルの鳴き声もしない……」と彼はまたもやため息をつく。

「カエルの鳴き声ならしますよ」彼のため息が私を勇気づけ、こうして抗議させたのだ。「夏が来て、大雨が降ると、カエルの大合唱が聞こえますよ。それもみなドブの中からね、北京はどこもドブだらけですから」

「ほう……」

数日後に、私の言葉は証明されたのである。エロシェンコさんが十数匹のおたまじゃくしを買ったからだ。彼はこれを買うと、自室の窓に面した中庭中央の小池に放した。その池は長さ一メートル、

幅六十センチ、仲密（チョンミー）さんが蓮を植えようとして掘った蓮池である。この池には蓮の花の一つも咲かなかったが、カエルを飼うにはなかなか恰好の場所であった。

おたまじゃくしは群れをなして水中を泳いだ。エロシェンコさんも足繁く通った。時に子供が彼に教える。「エロシェンコ先生、おたまじゃくしに足が生えました」すると彼はうれしそうに微笑んで言った。「ほう……」

だが池の音楽家の養成は、エロシェンコさんの事業の一つにすぎなかった。彼は以前からみずからの労働によりみずからの暮らしを支えよ、という主張の持ち主で、女性は家畜を飼い、男性は畑を耕すべし、とつねづね説いていた。そこで親しい友人に出会えば、中庭に白菜を植えると良いと勧めたものである。仲密夫人にも繰り返し勧めていた――蜜蜂を飼いなさい、鶏を飼いなさい、豚を牛をラクダを飼いなさい、と。果たして、しばらくすると仲密家にはひよこが溢れ、庭中をとびまわり、松葉ぼたんの若芽をすっかり食べ尽くしてしまったが、これも彼が勧めた結果なのだろう。

それ以来、ひよこ売りのお百姓がよくやって来た。行商のたびに何羽か買うのは、ひよこは消化器系の病気になりやすく、滅多に長生きしないからである。そのうえ、なかにはエロシェンコさん北京滞在中唯一の小説「ひよこの悲劇」（日本語口述による童話、あひるの池に入り溺れ死ぬひよこが主人公。一九二二年七月、魯迅が中国語に訳した）の主人公になるものも出てきた。ある日の昼前、例のお百姓がなんとあひるの雛を持ってきた。ピイピイ鳴いている雛だったが、仲密夫人はいらないと断った。エロシェンコさんが飛び出してきたので、皆が一羽を彼の両手の上に置いてあげると、あひるの雛は彼の両手の内でピイピイと鳴く。彼にはそれがとてもかわいく思

われ、買わずにはいられなくなった。一羽八十文、全部で四羽買った。

あひるの雛というのもたしかにかわいいもの、全身黄土色で、地面に置くと、よちよち歩き、互いに呼び合い、いつも一緒にいた。明日ドジョウを買ってきて食べさせよう、と皆の相談も決まる。エロシェンコさんは「そのお代も私に出させて下さい」と言った。

それから彼は授業に出かけ、皆もその場を離れた。まもなく、仲密（チョンミー）夫人が餌に残飯をやろうと思ってやってくると、遠くで水の跳ねる音がする。急いで見に行くと、例の四羽のあひるの雛が、蓮池で水浴びをしており、そればかりか真下に首を突っ込んでは何か食べている。雛を岸に追い上げたが、池はすっかり濁っており、しばらくして水が澄んでも、泥の中から細い蓮の根が数本見えるだけ。そして足の生えていたおたまじゃくしは、もはや一匹も見つからなかった。

「エホシコせんせ、いなくなっちゃった、カエルの赤ちゃんが」夕方、子供たちが彼の帰りを出迎えるや、いちばん小さい子がいの一番に言った。

「えっ、カエル？」

仲密夫人も出てきて、あひるの雛がおたまじゃくしを平らげてしまった顛末を報告した。

「ああ、ああ！……」と彼は声をあげた。

あひるの雛の産毛が抜け代わるころ、エロシェンコさんは突然彼の「母なるロシア」が恋しくなり、急ぎチタ（シベリア・ザバイカル地方の中心都市。ロシア革命後の一九二〇年から二二年まで極東共和国の首都。北京からロシアに入るビザは、チタで発給された）へと去って行った。

あたりがカエルの鳴き声だらけになる頃には、あひるの雛も成長して、二羽が白、二羽がぶちの羽根となり、しかも、もはやピイピイと鳴くのではなく、いつも「ガーガー」と鳴く。蓮池もあひるたちを遊ばせるにはもう小さすぎたが、さいわい仲密さんの家は土地が低く、夏の雨がひと降り来ると、中庭いっぱいに水が溜まり、あひるは大喜びで泳いだり、潜ったり、羽ばたいたりしては「ガーガー」と鳴くのである。

今では、夏の終わりから冬の始めに変わろうとしているが、エロシェンコさんは今も杳として消息を聞かず、いったいどこにいるやも知れぬ。

ただ四羽のあひるが、砂漠で「ガーガー」と鳴いているばかりである。

一九二二年十月

魯迅（ルーシュン、一八八一―一九三六）、本名は周樹人、浙江省紹興の人。一八九八年、科挙を試験中途で放棄して、南京の江南水師学堂に入学、一九〇二年、日本に留学し仙台医専で学んだが、一九〇六年に中退して東京に戻り、以後章炳麟の国粋革命論の影響下で文学運動を開始、ロマン派詩人論、アンドレーエフ翻訳などに筆を揮った。一九〇九年帰国、辛亥革命（一九一一）を故郷紹興で迎え、翌年、中華民国教育部高級官僚に招かれ北京に移住。「狂人日記」（一九一八）に続き、「故郷」「阿Q正伝」などの名作を発表している。「あひるの喜劇」（原題「鴨的喜劇」）は上海の『婦女雑誌』一九二二年十二月号に発表、処女作品

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

集『吶喊（とっかん）』（一九二三）に収められた。

訳・解説＝藤井省三

凌叔華（りょうしゅくか）

宴のあと

夜は更け人は散っていった。客間のソファには歳のころ三十すぎの男性が一人酔いつぶれ、気持ち良さそうに寝込んでいる。暖炉のそばに座った若夫婦は、ほろ酔い加減でひそひそ密談中。部屋いっぱいにしっとりと甘い空気が立ちこめている。女の方が、つと立ち上がった。

「私たちってうっかりしてるわね、子儀（ツーイー）さんがそこで寝てらっしゃるわ。何か掛けてさしあげなくちゃ。毛布を取って来るから掛けてあげて。あそこのスタンドは消してしまいましょう、まぶしくって眠りが浅くなるといけないわ」

「僕が行くよ」男の方も急ぎ立ち上がって言う。

女は構わずさっさと毛布を抱えてくると、

「そうっと靴を脱がせてあげて。毛布を広げて、肩と脚をしっかりくるむの。気持ちよく眠れることよ」靴が脱がされ、毛布でちゃんとくるまれるのを女は見守っていたが、再び口を開く。

「やっぱりここに居てあげましょうね。ちょっと経って目が覚めたら、この方きっとお茶やお水を

飲みたがるわ。さっき自宅には帰らないことにしたって言ってらしたの。うちのソファはお宅のベッドよりずっと寝心地がいいんですって」言いながらまた腰を下ろして、「お家に帰ってもちっとも面白くないなんて、本当にお気の毒ね」

男も元の通り妻の側に腰掛ける。部屋には房かざりのある明かりをたった一つ残すだけ、ほんのりと暗い。暖炉の火は、オレンジ色の柔らかい光を発して夫婦の笑顔を照らしている。テーブル上の小鉢の梅は、室温が高いせいか、甘い香りをしっとりとまき散らす。男は妻を眺めて目を細め、にっこりして言った。

「采苕、僕も酔っちゃったよ」

「大して飲んじゃいないって、言ってたのに」女は微笑む。

「酒じゃないんだ、この雰囲気で酔わされちゃった……目も鼻も耳も口も、魂までどっぷりね……心臓なんてもう——触ってごらん、こんなに速いんだぜ」言いさしてぴったり采苕に寄り添う。

采苕は曖昧な笑いで夫を迎え、すっと眠っている男の方に目を移す。

「酔っ払ったって認めなさいな。ほら自分から、耳も鼻も口も目も魂も、そして心臓まで酔ったって並べ立てたくせに。子儀さんの顔ほど赤くはないけど。あの方今日は本格的に酔っているわ」

夫は妻の言葉など全く耳に入らぬ様子で、相も変わらずとろんとした目付きで、彼女の手を引いて言う。

「ねえ君、僕だって全身酔わずにはいられないだろ？　妙なる美女にこころよき宵、おまけにシッ

クな部屋、みんな僕のものなんだ。いつも素敵で居心地よいこの部屋に座り、僕の女神がしつらえてくれた品々を見ているだけで、僕はうっとりしてしまう。そこに君の訪れを遥かに眺めればもうメロメロさ。今や目の前に座る天女に、住まうは麗しの宮殿、耳に響くは心を揺さぶる調べ、そして鼻をくすぐるのは――魂もとろけるような香り、梅やバラの甘い香りも何のその、ハスの花だって葉っぱの苦いのが玉に傷だ。僕の口は――女神の心づくしのご馳走を味わったばかりなんだが――ああ、まだまだ味わい足りないものがある、あの花の香に似て花の香でなく、甘いキャンディに似てキャンディでなく、甘酒に似……」

「はいはいもう結構よ、酔っ払いさん、また長々と小説みたいな文句で私をからかってるのね。もっと小さな声でお願いね、子儀（ツーイー）さんを起こしちゃうわ」

彼は夫人の手を取って幾度となく匂いを嗅ぐと、顔を上げてまた彼女をしげしげと眺める。

「君もちょっと酔ってるだろ？　頬のほのかな紅（くれない）、この素敵な色合いは花にたとえたら何だろう？　桃の花？　いや、俗っぽいな。牡丹の花じゃけばけばしい。菊の花は冷たい感じだし、梅の花？　これも貧相、みな失格だ」言いつつさらににじり寄り、「おっ、――これは絶品だ！　この眉については、一体何が匹敵しようか？　遥かなる山並み、いや、ぼんやりとし過ぎる。蛾眉（蛾の触角のように細長く曲がって美しい眉。美人の眉のたとえ）じゃ曲がりすぎだし、柳の葉じゃあ強（こわ）ばってる、新月じゃ寒々しい。だめだ、だめだ。眉の美しさは瞳の美しさに劣らないのに、どうして人はみな眉の美しさを無視するんだろう？」

今晩の采苕（ツァイシアオ）はいつもと違って、永璋（ヨンチャン）の話を一言一句心底から味わう気になれない。目はちらちら

と眠っている男を見やっていたが、ここで永璋に水を差す。
「私の頭も今夜はふらふら。お酒のあとのおしゃべりは好きじゃないのに、あなたったら滔々としゃべりっぱなし、のどが渇かない？」永璋は挫けもせぬ様子で、首を振り振り続ける。
「采苕、まじめに言って、眉の美しさだって重大なんだ。だけどふつう初対面じゃ、眉の美醜までは気付かない。こうして静かな晩に向かい合ってみて、やっと分かるんだ。ああ、君の眉はとびっきり美しい」
「永璋ったら、知らないわ、いつまでも人をからかってばかり」彼女はわずかに眉を上げると、くるりと永璋に背を向ける。
「からかっちゃいないよ」彼はあたふた弁解し、そろそろと采苕を引き戻す。
「僕は大自然を賛美してるところさ、この仙女を下界に遣わし、僕がじきじきにお仕えできるようにして下さったことにね。心からかしずいたって気が済まないのに、何でからかったりするもんか……思うに人は外見が美しければ、心もきっと美しいんだ。例えば君の心さ、いつだって僕を愉快にしてくれ、賛美させてしまう。この部屋にしろ、こうして君の手が加わるからこそ皆が誉めるんだ。もし誰かが王位と取り替えようと言ってきたって、この愛妻と

　ナンセンス、この部屋の物一品とだってお断り、そんなやつは精神病院に送り込んでやるさ」
采苕はこの時聞くも解せずといった様子で、ほろ酔い気分で永璋の肩を枕に、眠っている男を眺めたままだ。永璋はしょうこりもなく続け、

「そうそう、しあさっては新年だ、何を献上致しましょうか？　君がもたらす栄誉と幸福ときたら今晩の分だけでも、一夜語り通したって百分の一も言えやしない。ねえ君、言ってごらん、お望みは何だい？　値段なんか気にするなよ。君が望むなら、喜んでプレゼントするさ」

采苕（ツァイシアオ）はちょっと考えて、またまた眠っている男を眺める。子儀（ツーイー）はまさに熟睡の体で、頬の赤いことは紅を差したよう。神秘の思索が溢れる瞳は安らかにふわっと閉ざされ、黒々とした眉はきりりと中央で折れ角を作っている。日ごろ諧謔と論理に満ちたその口も、今はゆったりたわんで軽く結ばれ、ほおは福々と微笑んでいるかのようだ。こんな子儀（ツーイー）を采苕（ツァイシアオ）は見たこともない。彼の態度はいつも丁重そのもので、こんな風に酔って艶っぽく優雅に見えたことなどなかった。采苕（ツァイシアオ）は驚きの目を巡らすと途端にぽっと上気して、答えた。

「私何も要らないけれど、あることを許してほしいの……ほんの一秒だけなのよ」

「早くお言いよ」永璋（ヨンチャン）は上機嫌である。

「僕のものは君のもの、一秒どころか、千万年だっていいともさ」

「私ね……ちょっと恥ずかしいわ」

「大丈夫だって」

「あの方……」

「目を醒ましっこないよ、安心してお言いよ」

「私……彼の顔に口づけしたいの。どう、いいかしら？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com